



杜甫「春望」の「国」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007307

杜甫「春望」の「国」について

後 藤 秋 正

はじめに

杜甫の五律「春望」(『杜詩詳注』巻四。以下、『詳注』と略称)は、唐・肅宗の至徳二載(七五七)三月、反乱軍占領下の長安で書かれた。時に杜甫は四十六歳である。

国破山河在 国破れて山河在り

城春草木深 城春にして草木深し

という冒頭の句はとりわけ人口に膾炙している。とはいえ、「国破れて山河在り」の「国」とは何を指して言っているのか、という点についてはまだ議論を追加する余地があるようである。

一

「国」に関する諸説について簡潔に整理して述べているのは松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』(大修館書店、一九八七)。「春望」の執筆者は宇野直人である。同書は「国」について、A説(「国」を「国家」とする説)と、B説(「国」を「国都」と

する説)の二説があることを紹介したうえで、「異同の論拠」において、「本稿では、この詩はまず第一句で国家全体の状況を大きく提示し、次の第二句で画面をクローズアップして、作者自身が現に直面している長安の情景を描いたと考え、「国家」の意味(B説によれば、「国」字の連想観念)の方を重視した。」と述べている。小論も結論としてはこの見解に同意することになるが、確かに我が国における解釈は大きくは二分されている。まず、『唐詩解釈辞典』がA説を代表するものとして引く吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊(筑摩書房、一九七九)から見よう。

国家の組織の破滅を(「国破る」ということ、早く北宋人の旧注が引くように、「文選」二十五、晋の將軍の劉琨が、西晋の破滅のなかで、同志の親戚の後輩盧諶に与えた書簡「国破れ家亡ぶ」にもとづく。その文をやや長く引けば、匈奴の酋長劉曜の侵寇に対し、孤軍奮闘の劉琨は、述懐し
ていう、……今や「国破家亡、親友凋残、杖を負いて行吟すれば、則ち百憂俱に至り、塊然と独り坐すれば、則ち哀

しみと憤りと両つながら集まる」。この詩における杜の境涯も、同じであった。

また、B説の代表として引く前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』（東京堂出版、一九七〇。「春望」の項の執筆は高橋稔）は次のように言う。

春秋・戦国時代に「国」といえば、まず国都のある町が意識され、続いて国土全体に及んだ。唐代においても天下は唐帝国一つであり、外国は属領にすぎない。だから、この「国」も一義的には国都長安をさすのであり、その破滅はすなわち天下の破滅と意識されたのである。

このほかいくつかの指摘を見ておこならば、以下のようなものがある。

鈴木虎雄『杜詩』第二冊（岩波文庫、一九六三）は、「国都は賊に破壊されたが……。」と言ひ、鈴木修次『漢詩』（学燈文庫、学燈社、一九六三）は「国」の注に、「国都の長安を指す。一説に、国家の意にとつてもよいとするが、当時『国』といえは、国都の行政機構を主として指していった。」と述べる。小野忍・小山正孝・佐藤保訳注『杜甫詩選（一）』（講談社学術文庫二一三、一九七八）は、「国」を「国都、つまり長安のこと。国家の意味ではない。」とし、また黒川洋一『杜甫』（鑑賞中国の古典一七、角川書店、一九八七）は、「国破」について「国家の組織が破滅すること。」と言ひ、横山伊勢雄『政治と戦乱』（中国古典詩聚花一、小学館、一九八四）の「国破」の注は、「国家が破壊する。国は古代にあつては、国都のある町を意味し、

広がつて国土全体を意味しても用いられた。唐は天下を統一していたから、「国」も一義的には国都長安をさし、その破滅は天下の破滅と意識されたのである。」と述べる。

そもそも「国」（「國」）に多様な意味が含まれていることは確かであり、『漢語大詞典』を例にとれば、これを次のように十二に分類している。

- ① 国家。② 国都。③ 建国。④ 古代王・侯的封地。⑤ 地方、地域。⑥ 猶家郷。⑦ 專指与帝王或皇室有関的（人物・事件）。
- ⑧ 指本朝的。⑨ 国中最好的或最佳的。⑩ 指中国特有的。⑪ 指代表国家的。⑫ 姓。

「国」に解釈の違いが生ずるのは、これが本来有していた多義性に由来しているのであろう。

次に、中国においては「春望」の「国」はどのように訳されているのだろうか、この点を管見の範囲で確認しておこう。

- ① 『唐詩鑑賞辞典』（上海辞書出版社、一九八三）
「『国破山河在、……』。開篇即写春望所見。国都淪陷、城池残破、……。」

- ② 徐放『杜詩今訳』（人民日報出版社、一九八五）
「『国破指安禄山攻破長安。』」

- ③ 夏松涼『杜詩鑑賞』（遼寧教育出版社、一九八六）
「『国破』二字、語意双関、既指国家政局の残敗、時代的苦难、也暗涵国都長安残破的景象。」

- ④ 陶道恕主編『杜甫詩歌賞析集』（巴蜀書社、一九九三）
「上句、写国都長安被叛軍所蹂躪、……。」

⑤韓成武等『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、一九九七）

「国都已然淪陥而昔日山河依旧在眼、……。」

⑥李寿松・李翼雲『全杜詩新釈』（中国書店、二〇〇二）

「国破、指首都長安陥落。国、国都。」

③が国に二種の含意を認めるのは、すべて国を国都、首都の意味で捉えていることが見てとれる。『唐詩解釈辞典』の分類に従えばB説が大勢となっていると言えよう。

それでは、「国破」について諸注釈はどのような典拠を挙げているのであろうか。

『杜詩詳注』だけは他の注釈とは異なり、『斉国策』の「王蠋曰、国破君亡、吾不能存。」（王蠋曰く、国破れ君亡して、吾存する能わず。）という一文を引く。ただし『戦国策』にこのままの一文は見えず、類似した用例としては『戦国策』巻八に、張儀の発言として、「斉与魯三戰、而魯三勝、国以危、亡隨其後。……秦趙戰於河漳之上、再戰而再勝秦。……四戰之後、趙亡卒數十萬、邯鄲僅存。雖有勝秦之名、而国破矣。」（斉 魯と三たび戦つて、魯 三たび勝ち、国 以て危うく、亡ぶること其の後に随うと。……秦・趙 河漳の上で戦い、再び戦つて再び秦に勝つ。……四戦の後、趙 卒數十万を亡い、邯鄲僅かに存す。秦に勝つた名有りとも、雖も、国破れぬ。）と見えている。趙の国都である邯鄲は辛うじて残つても、結局のところ国は亡びたというのであるから、後者の国は明らかに国家を意味する。

このほか、『九家集注杜詩』巻十九などをはじめとして、出典を示すほとんどの注釈は、「劉越石云」として「家国破亡、

親友凋殘。」（家国は破亡し、親友は凋殘す。）という一文を引く。これはすでに吉川幸次郎『杜甫詩注』に指摘があったとおり、劉琨「答盧諶詩一首并序」に見える、「自頃軫張、困於逆乱。国破家亡、親友凋殘。」（自頃 軫張して、逆乱に困しむ。国破れ家亡びて、親友も凋殘す。）という一文を踏まえたものである。李善は「国破」の部分に、以下のような注を付している。

崔鴻前趙録曰、劉聰僭即位于平陽。又曰、聰遣從弟曜攻晋、破洛陽。又曰、遣子榮攻長安、陷之。

崔鴻の前趙録に曰う、劉聰 僭りて平陽に即位すと。

又曰う、聰 從弟の曜を遣りて晋を攻めしめ、洛陽を破ると。又曰う、子の榮を遣りて長安を攻めしめ、之を陥すと。

この用例を見る限りでは、李善は劉琨の「国破」が、洛陽と長安が前趙の劉聰が派遣した軍によって陥落したことを指していると考えたとれるが、西晋王朝が全体として滅亡の危機に瀕していることを言っているとも受けとれるのであつて、はっきりしない。

さてそれでは、杜甫の詩における「国」はどのような意味を有するものとして用いられているのであろうか。唐詩における「国破」の用例についても視野に入れながら、「春望」における「国」について検討することにした。

二

杜詩においては「国破」の用例は「春望」にしか見られない。

そこで杜詩において単独で「国」が用いられる例について概観しておこう。主な例は以下の通りである。

丈夫誓許国 丈夫 誓つて国に許す
憤惋復何有 憤惋 復た何ぞ有らん

〔前出塞九首〕（其三）、『詳注』卷二

決決泥汚人 決決として泥は人を汚し

狝狝国多狗 狝狝として国に狗多し

〔大雲寺贊公房四首〕（其四）、『詳注』卷四

微爾人尽非 爾微りせば人 尽く非ならん

於今国猶活 今に於いて国猶お活く

〔北征〕『詳注』卷五

向使国不亡 向に国をして亡びざらしめば

焉為巨唐有 焉くんぞ巨唐の有と為らん

〔九成宮〕、『詳注』卷五

卜宅從茲老 宅を卜して茲れより老いん

為農去国除 農と為りて国を去ること除し

〔為農〕、『詳注』卷九

傷時愧孔父 時を傷むこと孔父に愧じ

去国同王粲 国を去ること王粲に同じ

〔通泉駅、南去通泉縣十五鄉山水作〕、『詳注』卷一一

国待賢良急 国 賢良を待つこと急に

君当拔擢新 君 拔擢に当たること新たなり

〔送陵州路使君之任〕、『詳注』卷一一

国有乾坤大 国 乾坤の大なる有り

王今叔父尊 王は今叔父の尊なり

〔奉漢中王手札〕、『詳注』卷一五

国带烟塵色 国は带ぶ烟塵の色

兵張虎豹符 兵は張る虎豹の符

〔別蘇僕〕、『詳注』卷一八

国須行戰伐 国須らく戰伐を行うべし

人憶止戈鋌 人は戈鋌を止めんことを憶う

〔秋日夔府詠懷、寄鄭監李賓客二百韻〕、『詳注』卷

一九

郡依封土旧 郡は依る封土の旧

国与大名新 国は大名と新たなり

〔奉賀陽城郡王太夫人恩命、加鄧国太夫人〕、『詳注』

卷二二

これらの例のうち、「九成宮」は煬帝の隋王朝を指している。

また、「為農」と「通泉駅、南去通泉縣十五鄉山水作」の例は

故国、故郷というほどの意味で用いられ、「別蘇僕」の例は蘇

僕が赴任する湖南一帯を指して、南国というほどの意味で用い

られる。さらに、「奉賀陽城郡王太夫人恩命、加鄧国太夫人」

の例は荊南節度使であった陽城郡王・衛伯玉の母親が封じられ

ることになった称号の鄧国を指して言う。これら以外の例はす

べて唐の国家、あるいは唐王朝を指して用いられている。

ちなみに杜詩には「国家」の語が三例が見られる。

国家法令在 国家 法令在り

此又足驚吁 此れ又驚吁するに足れり

〔草堂〕、『詳注』卷一三)

国家成敗吾豈敢 国家の成敗 吾豈に敢えてせんや
色難腥腐餐楓香 色 腥腐を難(は)りて楓香を餐す

〔寄韓諫議注〕、『詳注』卷一七)

嘗読唐実録 嘗て唐の実録を讀むに

国家草味初 国家 草味の初め

劉裴首建議 劉裴 首として建議し

竜見尚躊躇 竜見 尚お躊躇す

〔別張十三建封〕、『詳注』卷二三)

これらの例は、杜詩において「国」とは別に、「国家」の語が用いられることを示しているが、「別張十三建封」に「唐実録」の語があるように、国家は唐王朝と同義である。このほか、杜詩において「○国」という構成をとる場合は、次のような語が用いられる。うち、「水国」として用いられる例は三例がある。一例をあげよう。

瀟湘水国旁鼉鼉 瀟湘の水国 鼉鼉に旁(かた)り

鄂杜秋天失鸚鵡 鄂杜の秋天 鸚鵡を失す

〔追酬高蜀州人日見寄〕、『詳注』卷二三)

この「水国」は杜甫のいる潭州を指す。

「江国」と「沢国」も、水の豊かな地方の意味で用いられる。

江国踰千里 江国 踰ゆること千里

山城近百層 山城 百層に近し

〔泊岳陽城下〕、『詳注』卷二二)

淡交随聚散 淡交 聚散に随い

沢国遶迴旋 沢国 遶りて迴旋せん

〔秋日夔府詠懷寄鄭監李賓客一百韻〕、『詳注』卷一九)
ただし、国都を指して言う例が皆無なわけではない。それは「京国」として用いられる場合である。

大師京国旧 大師は京国の旧なり

德業天機秉 德業 天機を乗る

〔西枝村尋置草堂地夜宿贊公土室二首〕(其二)、
注』卷七)

「大師」の句は、もと長安城内にある大雲寺の僧であり、秦州・西枝村に寓居している贊公が、都・長安の耆旧であることを言う。また、杜詩には「旧国」の語が三例見られるが、次の例は旧都・長安を指して言う。

郎伯殊方鎮 郎伯は殊方に鎮し

京華旧国移 京華は旧国移る

〔元日寄韋氏妹〕、『詳注』卷四)

ただし、次の二例の「旧国」には、都と故郷のイメージが重複して含まれていると考えられよう。

離亭非旧国 離亭 旧国に非ず

春色是他郷 春色 是れ他郷なり

〔江亭王閬州筵餞蕭遂州〕、『詳注』卷一三)

殊方日落玄猿哭 殊方 日落ちて玄猿哭し

旧国霜前白鴈来 旧国 霜前に白鴈来る

〔九日五首〕(其一)、『詳注』卷二〇)

このほか、「邦国」と言った場合は明白に唐の国家あるいは

国民を指している。

聖人篋篋恩 聖人 篋篋の思

実願邦国活 実に邦国の活せんことを願う

〔「自京赴奉先縣詠懷五百字」、『詳注』卷四〕

冀公柱石姿 冀公 柱石の姿

論道邦国活 道を論じて邦国活す

〔「鹿頭山」、『詳注』卷九〕

十四例見える「故国」はどうかであろうか。

覽物想故国 物を覽て故国を想う

十年別荒村 十年 荒村に別る

〔「客居」、『詳注』卷一四〕

この例は、杜甫が故郷として意識する長安・洛陽を指して言う。次の例も、故郷といった意味である。

故国三年一消息 故国 三年 一たび消息あり

終南渭水寒悠悠 終南 渭水 寒くして悠悠たり

〔「錦樹行」、『詳注』卷二〇〕

また、「故国」と「他郷」とを対にする例も三例あり、次の例は、洛陽附近ではまだ戦乱が終息しないことを言う。

故国猶兵馬 故国 猶お兵馬

他郷亦鼓鼙 他郷 亦鼓鼙

〔「出郭」、『詳注』卷九〕

次の例も故郷の意味である。

取醉他郷客 酔いを取る他郷の客

相逢故国人 相い逢う故国の人

〔「上白帝城二首」〈其一〉、『詳注』卷一五〕

他郷就我生春色 他郷 我に就けば春色生ず

故国移居見客心 故国 移居 客心を見ん

〔「舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄二首」〈其二〉、『詳注』卷二二〕

注』卷二二)

また、「錦樹行」と同じく、渭水の流れる長安の景物を思うことを言う例もある。

故国流清渭 故国には清渭流る

如今花正多 如今 花正に多からん

〔「泛江」、『詳注』卷一三〕

次の例も同様に長安を指して言う。

故国悲寒望 故国 寒望に悲しむ

群雲慘歲陰 群雲 歲陰に慘たり

〔「風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友」、『詳注』卷二三〕

卷二三)

また、「郷国」といった場合には明らかに故郷を指す。

雲物不殊郷国異 雲物殊ならず郷国異なり

教兒且覆掌中杯 兒をして且つ覆わしむ掌中の杯

〔「小至」、『杜詩詳注』卷一八〕

「故国」の語の用いられ方からも理解されるように、要するに「〇国」という語の「国」の場合は、当然のことだが一定の意味を有することではなく、前に置かれる語によってさまざまな意味を含むことになる。

では、「国破」という表現は唐代にはどのように表れているのであろうか。『全唐詩』からは以下のような例が見出せる。以下、これらについて見てみよう。『全唐詩』の巻数順に挙げる。

①戎昱「聞顔尚書陷賊中」(『全唐詩』卷二七〇)

聞説征南没きくまぐ 聞説きくまぐ 征南没すと

那堪故吏聞 那ぞ故吏の聞くに堪えんや

能持蘇武節 能く蘇武の節を持し

不受馬超勲 馬超の勲を受けず

国破無家信 国破れて家信無く

天秋有雁群 天秋にして雁群有り

同荣不同辱 栄えを同じうするも辱はづかしめを同じうせず

今日負將軍 今日 將軍に負まむけり

顔尚書は顔真卿(七〇九―七八四)のこと。徳宗の興元元年八月三日、叛軍の将、李希烈によって、宣慰使として赴いた汝州(河南省汝州市)で縊殺された。戎昱が顔真卿に対して「故吏」と称しているのは、顔真卿が昇州刺史・浙江西道節度使に任じられた時に彼に仕えていたことがあるからだとされる。戎昱が顔真卿の訃報をどこで聞いたかははっきりしないが、少なくともこの時期、戦乱が続いていたとはいえず、国都長安が占領されていた事実はない。

②楊乘「吳中書事」(『全唐詩』卷五一七)

名婦范蠡五湖上 名は婦す范蠡 五湖の上

国破西施一笑中 国は破る西施 一笑の中

楊乘は『唐詩紀事』卷四十七によれば、大中(八四七―八五九)初めの進士。殿中侍御史で終わった。二句は、呉王夫差の愛妃、西施が一笑しているうちに、范蠡の助力を得た越王勾践に呉が滅ばされたことを言っていて、国は呉を指す。

③雍陶「夷陵城」(『全唐詩』卷五一八)

世家曾覽楚英雄 世家 曾て覽る楚の英雄

国破城荒万事空 国破れ城荒れて万事空し

雍陶、字は国鈞は成都の人。大和八年(八三四)の進士。賈

島・白居易らと交流があった。詩題の夷陵(湖北省宜昌市の東南)は戦国・楚の邑。『史記』卷四十、楚世家に、頃襄王・横

の二十一年(前二七八)のこととして、「秦將白起遂拔我郢、

燒先王墓夷陵。」(秦將白起 遂に我が郢を抜き、先王の墓夷陵

を燒く。)とある。国が楚を指していることは明らかである。

この句は「春望」を意識したものであろう。

④許渾「姑蘇懷古」(『全唐詩』卷五三三)

………

吳岫雨來虛檻冷 吳岫 雨來つて虚檻冷やかに

楚江風急遠帆多 楚江 風急にして遠帆多し

可憐国破忠臣死 憐れむ可し国破れて忠臣死す

日日東流生白波 日日 東流 白波を生ず

許渾には「重經姑蘇懷古二首」(『全唐詩』卷五二七)もあり、
 〈其二〉の尾聯では、「当年国門外、誰識伍員忠」(当年 国門の外、誰か識らん伍員の忠なるを)と言っている。つまり、「忠

臣」は伍子胥のこと。従つて、「国」は呉を指すことになる。

⑤皮日休「練瀆」(全三四句。『全唐詩』卷六一〇)

31国破溝亦浅 国破れて溝も亦浅し

32代変草空緑 代変じて草空しく緑なり

詩題の練瀆は、呉王が開いて兵を訓練したと伝えられるほり。第三十一句は、呉国が減んだあと、使われなくなった練瀆は、砂泥が堆積して浅くなってしまったことを言う。

⑥胡曾「細腰宮」(『全唐詩』卷六四七。『万首唐人絶句』卷五三)

楚王辛苦戦無功 楚王 辛苦し戦つて功無く

国破城荒覇業空 国破れ城荒れて覇業空し

詩題の細腰宮は呉王が美女を置いたという宮殿。国は呉国を言う。

⑦胡曾「房陵」(『全唐詩』卷六四七)

趙王一旦到房陵 趙王 一旦 房陵に到るも

国破家亡百恨増 国破れ家亡びて百恨増す

房陵は湖北省房県の地。秦代以降、諸侯王の流罪地となった。趙王とは趙王遷のこと。趙が趙王遷を奉じて秦に降伏したのは秦王政(始皇帝)の十八年(前二二九)のことである。この国は、趙を指して言う。

⑧王之涣「惆悵詩十二首」(其四)(『全唐詩』卷六九〇。『万首唐人絶句』卷八)

隋師戦艦欲亡陳 隋師の戦艦 陳を亡ぼさんと欲し

国破応難保此身 国破れて応に此の身を保ち難かるべし

陳の後主・叔宝が隋軍に捕らえられたのは、隋の文帝・楊堅の開皇九年(五八九)正月のことである。「国」は明らかに南朝の陳を指して言う。

⑨周曇「苻堅 又吟」(『全唐詩』卷七二九)

無謀拒諫仍輕敵 謀無く諫めを拒み仍お敵を軽んず

国破身擒将奈何 国破れ身擒にせらるるも将た奈何せん

前秦の苻堅が、新平(陝西省彬縣)の仏寺で後秦の姚萇に殺されたのは東晋の太元十年(三八五)のことである。ここは前秦を指して言う。

⑩裴瑤「闔閭城懷古」(『全唐詩』卷七七一、同卷八〇一。『万首唐人絶句』卷六五)

五湖春水接遙天 五湖の春水 遙天に接し

国破君亡不記年 国破れ君亡して年を記さず

作者の裴瑤について詳細は不明である。闔閭城は春秋・呉の闔閭(前五一一四九六在位)が伍子胥に築かせた。呉の都(姑蘇)であり、蘇州の別称ともなっている。五湖は太湖。呉国が夫差の時に越王勾踐によって滅ぼされたのは紀元前四七三年のことである。この例も呉という国を指していることは間違いないからう。

⑪崇聖寺鬼・紫衣人「題壁」(『全唐詩』卷八六六)

家亡国破一場夢 家亡び国破るるは一場の夢

惆悵又逢寒食天 惆悵として又逢う寒食の天

この詩は『太平広記』卷三百五十四、鬼三十九に、『玉堂閑話』を典故として載せる。そこでは寒食の日に、漢州(四川省広漢

市)の崇聖寺に現れた紫衣の人が壁に書きつけた絶句ということ
になつてゐる。

⑫宮嬪・京昭儀宝仙「冥会詩」(『全唐詩』卷八六六)。「万首
唐人絶句」卷六八)

自從国破家亡後 国破れ家亡びて自從り後

隴上8惟添芳草新 隴上 惟だ添う芳草の新たなるを

『万首唐人絶句』はこの詩を「吟送酒」と題して収録する。
ただし作者や作詩の背景については一切が不明である。⑪と⑫
の詩はいずれも国が何を指して言うかはつきりしないが、国都
と限定して考える必要はないであろう。

以上の例からすれば、⑪と⑫の例が指すところは判然としな
いものの、唐詩における「国破」の例からは、国が明白に国都
を指すという例は見出すことができない。このほか「国亡」と
言う例も少数ながら見出すことができる。例えば開元年間に進
士である李華の「詠史十一首」(其九)(『全唐詩』卷一五三)
には、次のようにある。

蜀主相諸葛 蜀主 諸葛を相とす

功高名亦尊 功高く名も亦尊し

……

国亡身不存 国亡びて身は存せず

社宮久蕪没 社宮 久しく蕪没す

これは明白に蜀という国家・王朝を指している。胡曾には二
例がある。「詠史詩・郴県」(『全唐詩』卷六四七)では、

義帝南遷路入郴 義帝 南遷して路は郴に入る
国亡身死乱山深 国亡び身死して乱山深し

と言ひ、「詠史詩・成都」(同)では、

年年来叫桃花月 年年 来りて叫ぶ桃花の月

似向春风訴国亡 春风に向かつて国の亡びしを訴うるが似

し

と言ふ。前者は楚の懷王(義帝)が郴(湖南省郴州市)に徙さ
れる途中、項羽の命令によつて殺されたことを述べていて、国
は楚を指すのであろうし、後者の国は、戦国時代の蜀の王となつ
た杜宇(望帝)の生まれ変わりとされるほととぎすが、亡国の
恨みを訴えるように鳴いていることを言つていて蜀を指す。こ
れらはいずれも国都を指すとは考えられない。

おわりに

唐詩の選集が編まれる場合、杜甫「春望」を採録しない例は
稀有であろう。冒頭に記したように、それらの多くは国を、国
家か国都かのどちらかに重点を置いて解釈している。

今まで述べてきたことを仮にまとめておくならば、以下のよ
うになるう。

杜詩において国が単独で用いられるときに、これが国都とい
う意味で用いられることはない。また、「○国」という場合、
明白に国都を指すのは「京国」という場合にほぼ限られる。唐
詩の「国破」という例を見た場合、軽々に判断を下せない例も
あるが、明白に国都を指すと断定できる用例は見出せない。従つ

て、「春望」の国は、両者を含蓄するという見解を除外して、どちらを指すかと限定して考えるならば、少なくとも直接的には国都のみを指して言うことはない。また、杜甫以外に「国破」という表現が用いられるのは中唐以後の詩人に限られる。同じことは、李華の例を除けば、「国亡」についても言える。時勢に鋭敏な感覚を有する詩人たちにとって、中唐以降は唐王朝が確実に衰退に向かっていくことが明白に意識されていたこととも関係しよう。そのような時に国都長安のみが意識にのぼるとは考えにくい。彼らにとって国は国家ないしは唐王朝であったのである。

最後に臆測をつけ加えれば、次のようなことも考えられよう。至徳元載（七五六）六月、安祿山麾下の孫孝哲らの軍によって長安は陥落したが、翌至徳二載九月に至ると長安は僕固懷恩、李嗣業らの唐軍によって恢復されたのであり、唐王朝はその後も、天祐四年（九〇七）まで一百五十年ほどの余命を保つ。つまり唐代以降の注釈者にとっては、杜甫が「春望」を詠じた時点では、安史の乱によって唐王朝が壊滅的な打撃を受けていたとはいえず、滅亡してはいないということはあるに、当然の事実であった。そのことが「国」は唐という国家・王朝、もしくは国家機構全体を指すのではなく、国都長安を指すという解釈を生む背景となっていたのではなからうか。

注

(1) 同氏『唐詩の鑑賞―珠玉の百首選―』（ぎょうせい、

一九七八）では、「国破」れるとは、国家の機構と統一が崩壊してしまったことをいう。具体的には、国都のある町を国と意識する中国の場合、都長安が叛乱軍の手に奪われたことをさす。国都の崩壊はそのまま国家の崩壊と意識されていた。人為の秩序の最大の変転である。」と説明を加えている。

(2) 第一義的に国（國）が、都邑、国都を指していたとする見解も根拠は乏しい。

(3) このほか管見に入ったものでは、『集千家註分類杜工部詩』巻一〇と『分門集註杜工部詩』巻二が、それぞれ「洙曰」「王洙曰」として同様の一文を引いている。このほか明・邵傳『杜律集解』が「国以社稷为重、今惟山河在、可見社稷幾亡。」（国は社稷を以て重しと為す、今は惟だ山河在るのみ、社稷の幾んど亡ぶることを見る可し。）と言い、『杜律趙註』巻上も同様である。この社稷も国家の意味で用いられているのではなからうか。そうだとすると、国都の意味であるとされたのはそれほど古いことではない。

(4) このほか「薄暮」（『杜詩詳注』巻一一）に、「故国見何日」（『故国 見る何れの日ぞ』という句があるが、『九家集注杜詩』巻二四は「故国」を「旧国」に作る。

(5) 『旧唐書』巻一二八、本伝による。『旧唐書』巻七、徳宗紀は、貞元元年（七八五）のこととする。

(6) 傅璇琮主編『唐才子伝校箋』（中華書局、一九八七）

による。臧維熙『戎豆詩注』（上海古籍出版社、一九八二）は、広徳元年（七六三）八月、顔真卿が荆南節度に任じられようとした時のこととしている。

(7)

佟培基編撰『全唐詩重出誤取考』（陝西人民教育出版社、一九九六）に、「閩閩城懷古、又作劉瑤。《才調》一〇作劉、《絶句》六五誤作裴、《統箋》八六六批《絶句》收之。」という指摘があるように、『全唐詩』卷八〇一には劉瑤の作として「閩閩城懷古」を含む詩三首を収録する。『唐才子伝』卷二、李季蘭の条に女流詩人を列挙する中に劉瑤の名が見えている。劉瑤とするのが正しいのであろう。

(8)

『万首唐人絶句』は、「隴上」を「壠上」に作る。

(9)

「○国亡」という表現もある。羅隱「西施」（『全唐詩』卷六五六）には、「越国亡来又是誰」（越国 亡び来るは又是れ誰ぞ）と言い、韋莊「謁巫山廟」（『全唐詩』卷六九八）には、「為雨為雲楚国亡」（雨と為り雲と為つて楚国亡ぶ）とある。これらの例は「国亡」と言った時の国が国家を表すことを示唆している。

(10)

類似した表現に「国滅」、「国滅亡」がある。後者は潘岳「西征賦」（『文選』卷一〇）に、「国滅亡以断後。」（国は滅亡して以て後を絶つ。）とあって秦国の滅亡を言うが、両者ともに『全唐詩』には見られない。